

昔むかし、大きな森のまんなかに古いお城があつて、そこに魔女が住んでいました。魔女は、お城の近くにやってきた人間を、だれでもまほうにかけてしまう力を持っていました。それが男なら、しばらくのあいだ、口がきけなくなつて、根が生えたように動けなくなりました。女なら、鳥に変身させられました。魔女はその鳥を、小さな鳥かごに閉じこめてなぐめては、毎日白い種や黒い種をえさにやるのでした。

森の近くの村に、兄さんと妹が、親たちと暮らしていました。兄さんの名前はヤネケン、妹はミーケンといいました。

ある日のこと、ヤネケンとミーケンは、薪を集めに森へ入つて行きました。ところが、道に迷つてしまい、あてもなく歩いていくうちに、とつぜん、魔女のお城のそばまで来てしまったことに気づきました。ふたりは、真つ青になつて、走りだしました。

けれども、手おくれでした。魔女は子どもたちを見つけて、すぐにまほうをかけてしまいました。ヤネケンは、まるで根が生えたように動けなくなりました。口もきけません。ヤネケンの目の前で、ミーケンが、胸に白いはんてんのある鳥になつてしまいました。そこへ、魔女がやつて来て、鳥を小さな青い鳥かごに閉じこめて、つれて行ってしまいました。ヤネケンは、力なくそこに立っているばかりでした。

夕方になると、魔女がもどつて来て、ヤネケンのまほうを解きました。ヤネケンは、魔女に、

「どうかお願いします。ミーケンを返してください」とたのみました。けれども、どんなにたのんでもむだでした。魔女は、

「すぐ从这里から出ていけ。帰らせてもらえるだけでもありがたいと思うんだね。だが、もしもう一度ここへもどつて来ようものなら、おまえを柳の木にしてやる。あの小川のほとりにたくさん立っている柳の木のようにね」

ヤネケンは急いで村へもどりましたが、いつかミーケンを助けだして仕返しをしてやるうと心に誓いました。

それからというもの、ヤネケンは、お城の周りをぐるぐる歩き回りました。もちろん、あんまり近くによることはしませんでしたけれど。

ある日のこと、ヤネケンはこの森で、ひとりのおじいさんに会いました。おじいさんがずいぶん弱よわっているように見えたので、ヤネケンは、

「なにか、お手伝てつだいしましょうか」とたずねました。おじいさんは、

「ありがとう。だが、何もしてもらうことはないよ。おまえさんは、こんなところで何をしているんだね」といいました。ヤネケンが、

「魔法のまほうで鳥に変えられた妹を助けたいと、毎日、お城の周りを歩いているんです」というと、おじいさんは、おどろいていいました。

「わしも魔法にまほうをかけられたんだよ。そして、妹は鳥に変えられたんだ。わしは、あの魔法をやっつける方法をさがして世界じゅうを歩いた。そして、とうとう、アフリカの大魔術師まじゅつしに会ったんだ。大魔術師は、こういった。『鷲わしの巣すに、へびのたまごをひとつ入れて育てさせるのだ。鷲の子といっしょに育てられたへびの皮こそ、その魔法に勝つ』とな。わしは今ここに、そのへびの皮を持っている。だが、わしは弱よわっていてまもなく死ぬしだろう。だから、この皮をおまえさんにやろう。どうか、これで魔法をやっつけて、おまえさんの妹とわしの妹を助けてやってくれ」

こういうと、おじいさんは、永遠えいえんに目をとじました。

ヤネケンは、へびの皮を持ってお城に入って行きました。すぐに、魔法がヤネケンを見つけてきました。魔法はただちにまほうを使い始めましたが、なんのききめもありません。魔法は自分のまほうが、もつと強い力に負けていることに気づくと、鳥かごを集めてある部屋に逃げこみました。そして、小さな青い鳥かごを手にとって逃げ出そうとしました。ヤネケンは追いかけていって、その鳥かごの中の鳥の胸に白いはんてんがあるのを見ました。妹のミーケンでした。

ヤネケンは、魔法に追いつくと、へびの皮で魔法の頭を打ちました。たちまち、魔法は倒たおれて死んでしまいました。そのとたん、鳥かごの中の鳥たちが、みんな娘むすめになつて出て来ました。

ヤネケンとミーケンは、いっしょに家に帰りました。お父さんとお母さんがどんなによるこんだことか。それは、いわなくてもわかるでしょう。

村上郁再話

資料『世界の民話26 オランダ・ベルギー』小沢俊夫訳／ぎょうせい